

近畿地方のカツオ釣り針について

—紀伊半島のカツオ釣り針について—

富加見泰彦（和歌山県立紀伊風土記の丘）

1 はじめに

古墳時代の海浜集落は海の生業を専らとし、土器製塩に留まらず、釣り針、土錘などの漁撈具など海の生産用具が出土する。このことから海を舞台とした生産活動が活発であったことがわかる。

また、これら海浜集落には生産活動の実態を明らかにするために必要な動物遺体やそれを素材とした考古資料も遺存する好条件が整っており、海人集団広範な移動並びに生産・流通を考える上でも貴重な資料を提供している。

2 カツオについて

カツオに関する記述は『古事記』（712 和銅 5 年）に「堅魚かたうお」の記述が初見である。明治時代を迎えるまで、天皇家代々の料理役を受け持つ家系は膳臣、高橋氏と定められていた。高橋氏の祖は磐鹿六獲命（イワカムツカリノミコト）といい、高橋氏成立の由来を伝える『高橋氏文』には次の記述がある。なぜ、日本人はカツオにこだわったのか、明快な答えは持ち合わせていないが、カツオは季節的なもので「黒潮系」のカツオは3月末に四国・紀伊沖、4月5月には伊豆・房総沖、8月には金華山・三陸沖に達し、10月に南下する。毎年黒潮に乗って大量に確実にやってくる。サケ・マスと同様の待機漁業。カツオは大群である。そこで問題になるのは、貯蔵をどうするかという問題がある。貯蔵あるいは何らかの処理ができなければとつてもしょうがない。そこで考えられたのが前述の方法であろうと考えられる。

かつお節の先祖というべきカツオの加工品は古代からある。

『大宝律令』（701 大宝元年）、『養老律令』（718 養老2年）『延喜式』（927 延喜5年）に
「堅魚（かつお）」・・・生カツオを日干した素干しのカツオ
「煮堅魚（にかたうお）」・・・煮て乾燥させ堅くしまったカツオ
「堅魚煎汁（かたうおいろり）」カツオの煮汁をさらに煮熟したもの 『鯨の産業と文化』

3 釣り針の分布

県下における釣り針の出土例はさほど多くはない。管見では6遺跡で23例で（銅製1例、鉄製15例、鹿角製7例）を挙げることができる。

第1表 釣り針出土地名

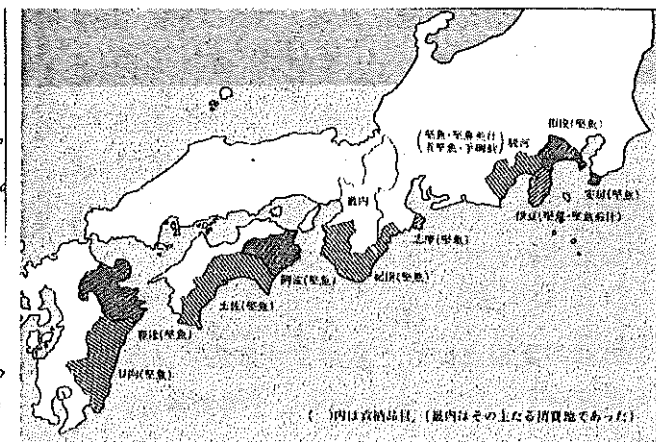
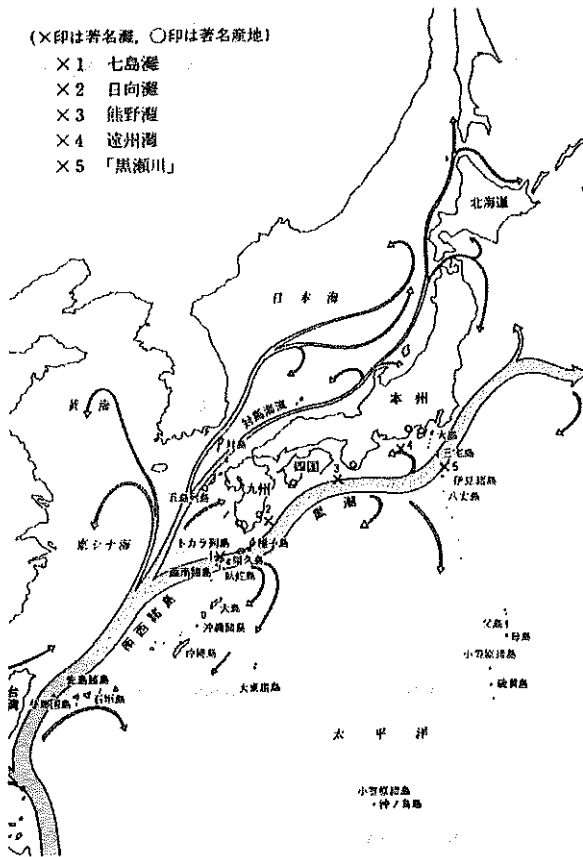
遺跡名	銅製	鉄製	鹿角製	軸	時期
和歌山市大谷川遺跡	1				弥生
和歌山市西庄遺跡		9	2	4	古墳時代（5世紀～6世紀）
御坊市東大人遺跡		1			古墳時代
田辺市磯間岩陰遺跡			4		古墳時代（5世紀）

白浜町日向浦遺跡		1	古墳時代（4～5世紀）
白浜町オリフ古墳	5		古墳時代（6世紀後半）

上記の遺跡のうち、和歌山市西庄遺跡、田辺市磯間岩陰遺跡、日向浦遺跡で出土した鹿角製の釣り針がカツオ用である。これらの釣り針を詳細に観察した久保和士は、その根拠として

- ① 極めて大型のみからなること、軸部に鹿角を用い肥厚させること、
- ② 紐孔の穿孔方向、軸下端や腰部に何らかの有機物を巻き付けた痕跡を有するものがあること、
- ③ 針部が無アグで外へ開くこと、
- ④ 腰部にアグとは逆方向の突起を持つものがあること、紀伊半島から三陸海岸の太平洋岸のみに分布すること、
- ⑤ 共伴する魚類遺体にカツオが含まれる遺跡が多いことなどを挙げている(久保 1997)。

西庄遺跡では鉄製の釣り針と角釣り針の軸とみられる端部を斜めに穿孔した鹿角製品が出土している。横須賀市東蓼原遺跡例では鉄製釣り針の一部が軸にのこっている例があることから結合釣り針である可能性が高いと考えている。西庄遺跡で発見された動物遺体で最も多いのがカツオであることもこれを裏つけるであろう。



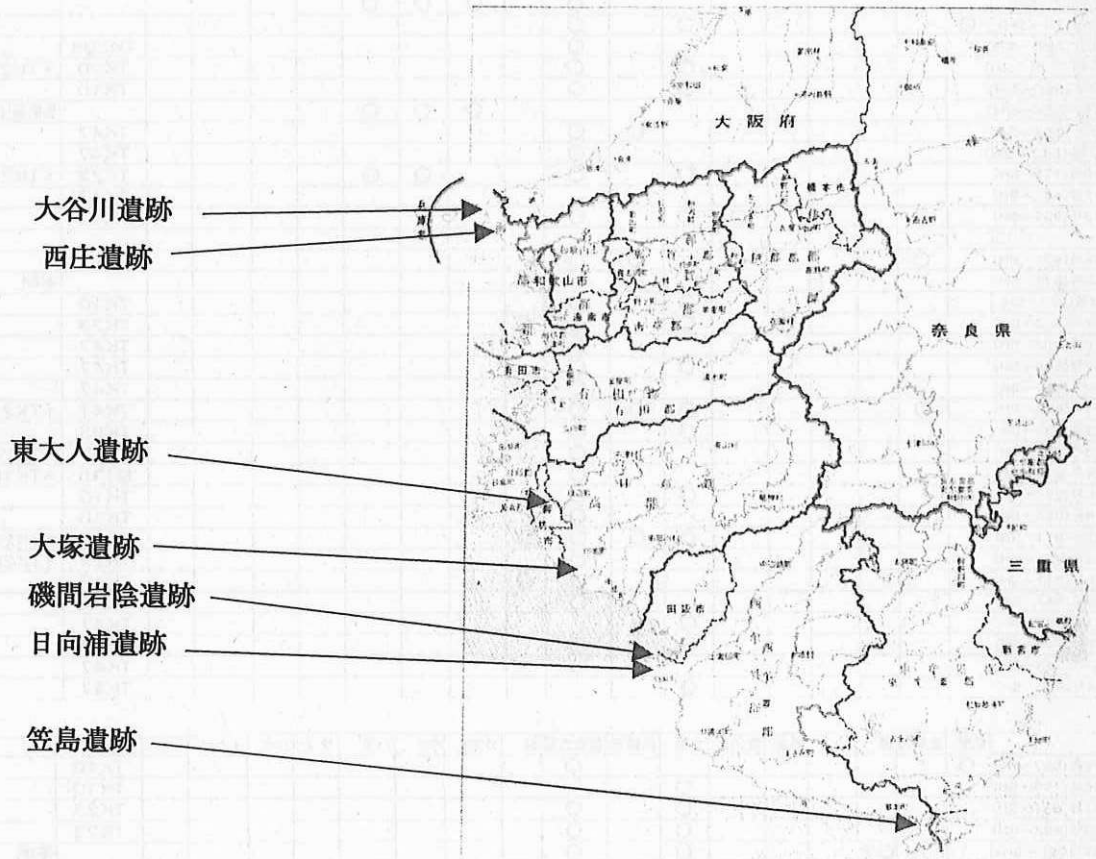
国名	調	産	中男作物
志摩(三重県)	堅魚	堅魚	
駿河(静岡県)	煮堅魚 2130斤13両 堅魚 2412斤		手網鮪 39斤13両2分 堅魚煎汁
伊豆(静岡県)	堅魚		堅魚煎汁
相模(神奈川県)			堅魚
安房(千葉県)			堅魚
紀伊(和歌山県)	堅魚		堅魚
阿波(徳島県)	堅魚 535斤8両		
土佐(高知県)	堅魚 855斤		堅魚
豊後(大分県)			堅魚
日向(宮崎県)	堅魚		

第2図 延喜式にみられるカツオ貢納国

第1図 日本列島をめぐる黒潮流路図

ものと人間の文化史 97 『鏗節』 宮下章 2000 から引用

- カツオ群の形態
- ①島付カツオ群
 - ②瀬付カツオ群
 - ③野天カツオ群の3種類に区分される。



第2 図 遺跡分布図

4 西庄遺跡における漁撈活動

西庄遺跡は広義の和歌浦湾を臨む遺跡で長大な砂嘴に立地する遺跡で5世紀になって急激に広がりを見せる遺跡で、古墳時代最大級の漁業集落で集落の西側が生産空間、東側の空間が墓域、その真中が居住空間である。

西庄遺跡の集落は大規模な製塩遺跡である一方で、擬餌針、疑似餌、鉄製釣針、刀子柄、土錘（棒状土錘）などの卓越した漁具と、住居跡などから検出されるさまざまな動物遺体は、「製塩」のみならず「漁撈」をも含めた生産活動が想定できる遺跡である。土師器、須恵器の形式に従ってその変遷をみるとⅦ期に分けることができる。

第Ⅰ期（庄内式土器）

第Ⅱ期（布留式土器/TK73）

第Ⅲ期（TK216～TK208）

第Ⅳ期（TK23～TK47）

第Ⅴ期（MT15）

第Ⅵ期（TK10～TK43）

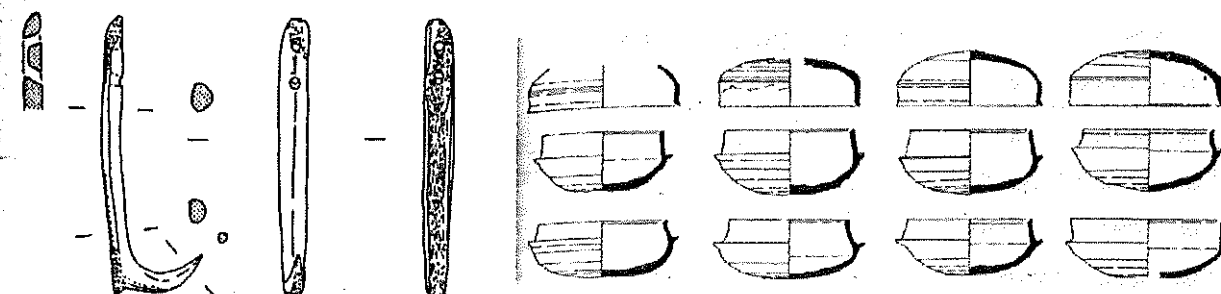
第Ⅶ期（TK209以降）

堅穴住居跡から出土した海の生産用具及び動物遺体を示したのが第2表である。

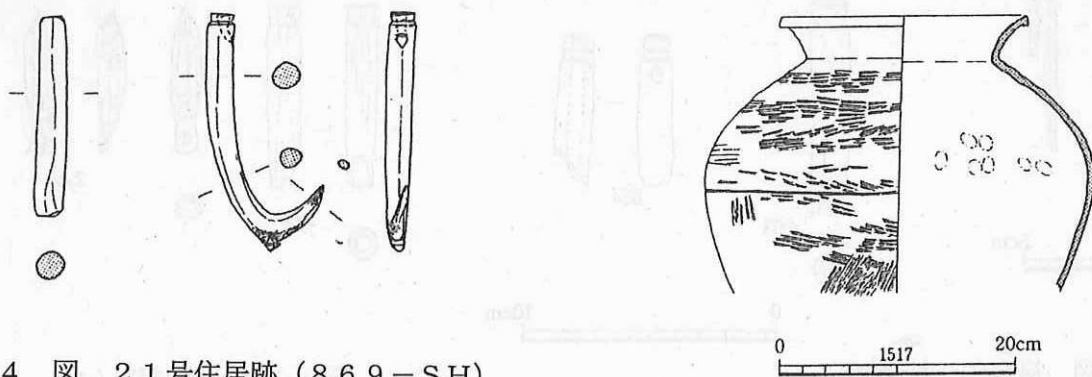
第2表 西庄遺跡における海の生産用具及び動物遺体

遺構番号	釣り針			提銀	刺突具		網具		土器		動物遺体					時期	備考	
	鉄製	鹿角製	輪		鉄製	鹿角製	土織	紡錘車	製塩土器	鉢	カツオ	タイ	ハモ	サワラ	ハタ			イノシシ
1号(1-SH)				○	○			○	○					○				
2号(2-SH)									○									
3号(17-SH)	○						○											
4号(385-SH)									○									TK208
5号(576-SH)							○											TK10 *TK23
6号(560-SH)							○											TK10
7号(554-SH)												○	○	○				5世紀代
8号(553-SH)								○										TK47
9号(517-SH)									○									TK47
10号(475-SH)							○						○	○				TK23 *TK208
11号(481-SH)																		TK47
12号(969-SH)						○	○											TK47
13																		
14号(972-SH)	○					○		○										TK47
15号(971-SH)																		不明
16号(851-SH)							○											TK10
17号(852-SH)						○	○				○							TK23
18号(853-SH)						○												TK47
19号(856-SH)							○											TK47
20号(857-SH)																		TK47
21号(869-SH)	○						○	○										TK47 *TK23TK47
22号(839-SH)							○											TK23
23号(831-SH)											○							TK47 *TK23TK47
24号(825-SH)																		MT15 *TK10
25号(827-SH)							○											TK10
26号(826-SH)																		TK10
27号(811-SH)							○	○										TK23 *TK208
28号(826-SH)																		TK23 *TK208
29号(811-SH)																		TK47
30号(847-SH)																		TK208
31号(889-SH)							○											TK47
32号(848-SH)							○											MT15
33号(743-SH)																		TK47
34号(650-SH)							○											TK47

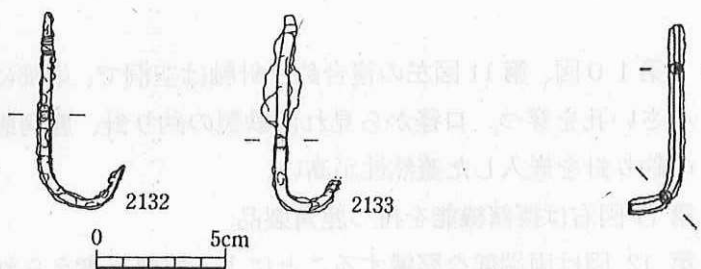
	鉄製	鹿角製	輪	鉄製	鹿角製	土織	紡錘車	製塩土器	鉢	カツオ	タイ	ハモ	サワラ	ハタ	イノシシ	シカ	須磨		
35号(667-SH)	○							○											TK10
36号(759-SH)						○													TK10
37号(651-SH)						○													TK23
38号(808-SH)						○													TK23
39(1065-SH)			○?			○													不明
D地区Ⅲ層			○			○													
D地区Ⅳ層						○													
土坑B			○																
E地区Ⅲ層			○		○	○			○										
F地区Ⅲ層			○	○		○		○											
Ⅳ層					○	○													
G地区Ⅳ層	○					○													
H地区Ⅲ層	○					○													
4号墳	○					○													



第3図 14号住居跡(972-SH)鹿角製釣り針と共伴土器

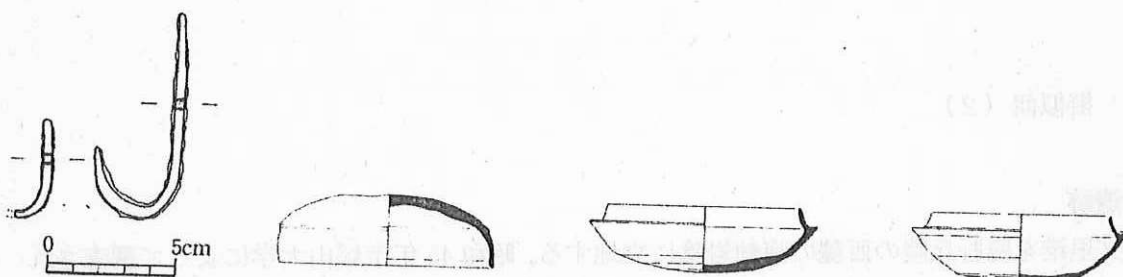


第4 図 21号住居跡(869-SH)
鹿角製釣り針と共伴土器

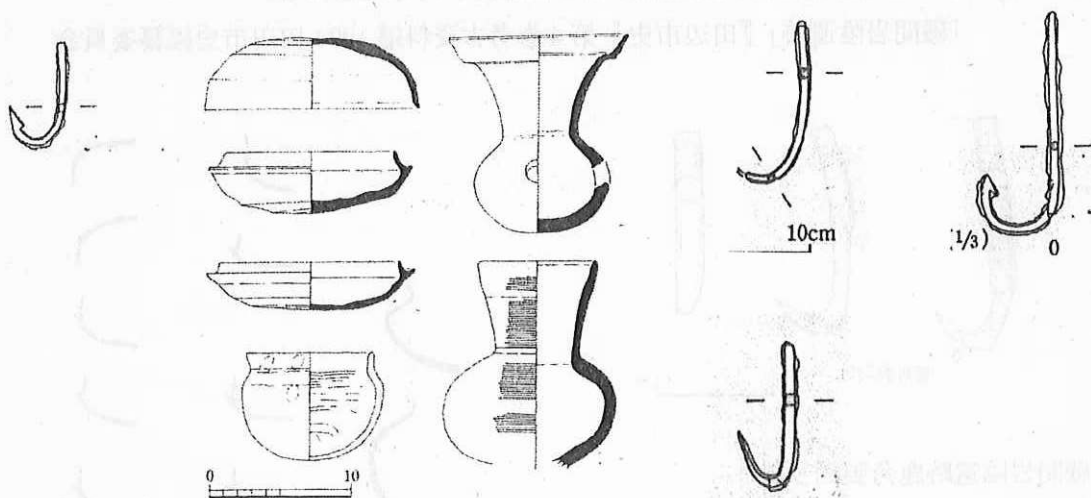


第5 図 3号住居跡(17-SH)
鉄製釣り針

第6 図 第17号住居跡(852SH) 鉄製釣り針

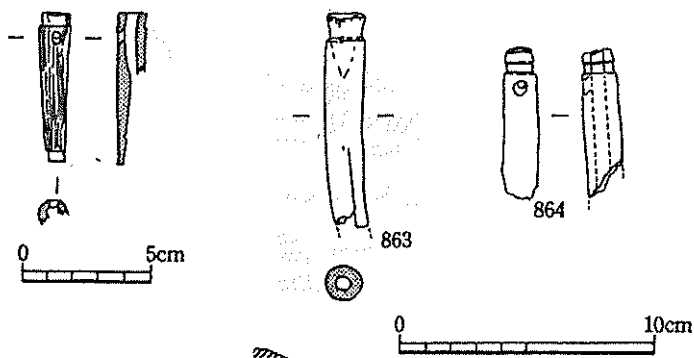


第7 図 35号住居跡(667-SH) 鉄製釣り針と共伴土器

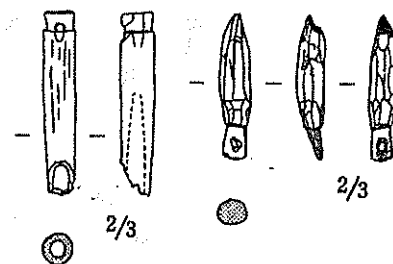


第8 図 4号墳出土(2108-SG) 鉄製釣り針

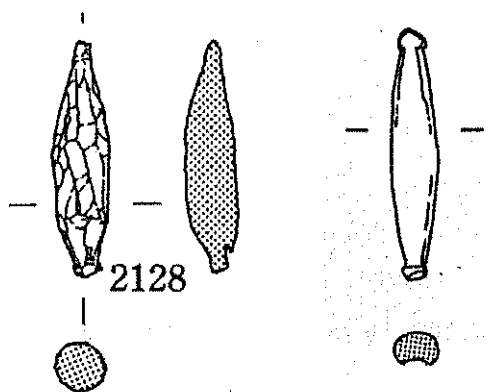
第9 図 包含層(Ⅲ層) 出土鉄製釣り針共伴土器



第10 図 複合釣り針(軸部)



第11 図 擬似餌 (1)



第10図、第11図左の複合釣り針軸は空洞で、端部に小さい孔を穿つ。口径から見れば鉄製の釣り針、鹿角製の釣り針を嵌入した蓋然性が高い。

第11図右は擬餌機能を持つ鹿角製品。

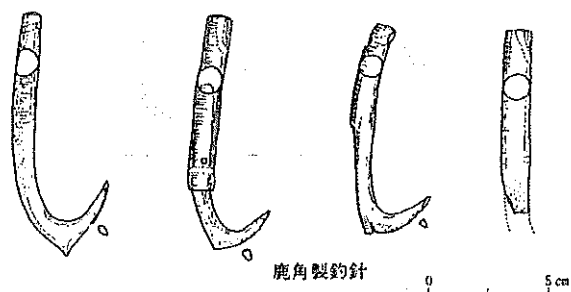
第12図は両端部を緊縛することによる擬餌と考えられる。

第12 図 擬似餌 (2)

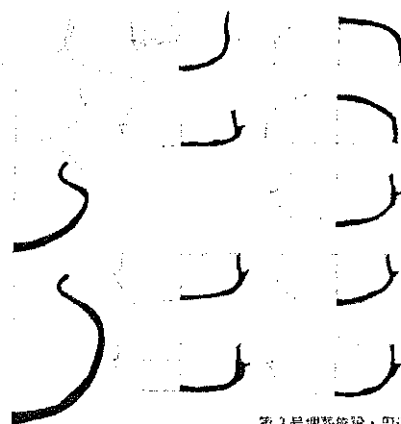
5 磯間岩陰遺跡

田辺湾の文里港を臨む丘陵の西麓の海蝕岩陰に立地する。昭和45年帝塚山大学によって調査された。5～6世紀にかけての埋葬施設が8基検出され、古墳時代の漁撈集団の埋葬法が明らかとなった。このうち1号石室からは鉄銚、鹿角製の複合釣り針、2号石室からも鹿角製釣り針が出土している。これら釣り針については副葬された須恵器から5世紀後半と考えられる。

「磯間岩陰遺跡」『田辺市史』第4巻考古資料編 1994 田辺市史編纂委員会



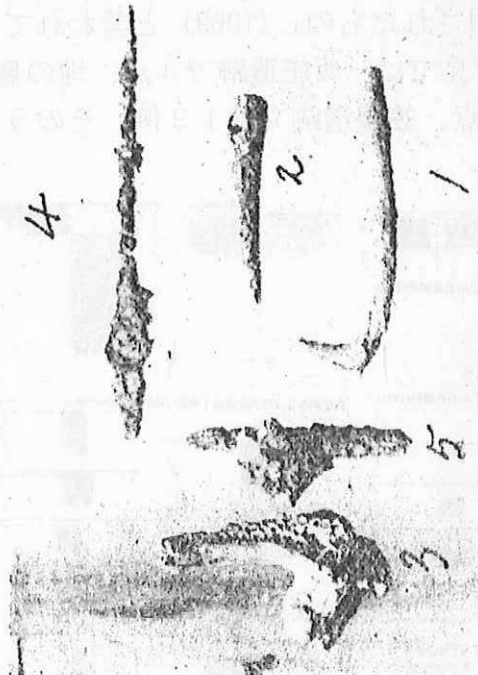
第13 図 磯間岩陰遺跡鹿角製釣り針
共伴土器



第2号埋葬施設・田辺

6 日向浦遺跡

日向浦遺跡は西牟婁郡白浜町堅田に所在する田辺に面した通称日向浦海岸に立地する古墳時代の海浜集落。製塩土器、須恵器、土師器のほか漁撈具では石錘。紡錘車、敲石、砥石も出土する。鹿角製釣り針は9cmを測る。



- 1 鹿角製釣り針
- 2 ツノ釣り針?

浦 宏「紀伊国西富田村日向浦貝殻調査概報」
『紀伊考古』第4巻第1号 1941 から引用

第14図 日向浦遺跡鹿角製釣り針ほか

7 笠島遺跡

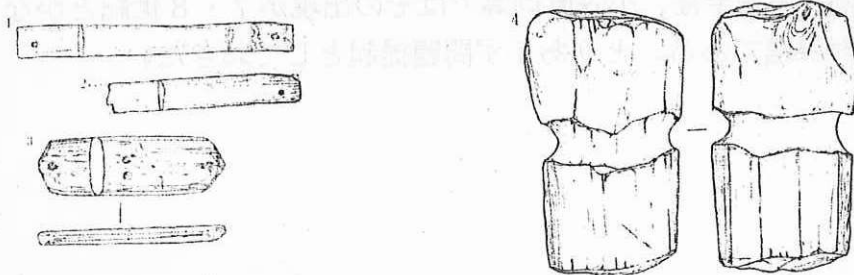
笠嶋遺跡は、本州最南端、紀伊半島の先端に位置し、熊野灘に面し陸繋島の潮岬が砂州の発達によって本州と結びついた砂州上に立地した遺跡である。砂州の東西は、海に面し、東は大島、通夜島、苗我島によって湾内は天然の良港が形成されている。台風などの風波浪の退避港としても有名な地で、西は二色浦を擁し『日本書紀』神武天皇即位前記に見える「熊野荒坂津（丹敷浦）」の伝承地としても著名で、こちらも古くから漁港として知られている。遺跡は昭和28年に県立串本高校の運動場建設の第1期工事によって木器、土器片が出土したことが契機で調査された。紀伊半島の沖には黒潮が流れているため、漁撈に関する遺物も多く、自然遺物にもカツオ、サメ、エイなどの外遊性の魚骨が出土している。

笠島遺跡

遺構番号	漁撈具				土器			捕獲魚類					動物遺体		時期
	割り舟	漁撈具	漁網具	浮子	土錘	製塩土器	大型鉢	カツオ	ブダイ	サメ	エイ	ウミガメ	イノシシ	シカ	
3・4層	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

*釣り針等の出土はない。紀南地方では現在でも金属製のツと呼ばれる擬餌を使用している。対象魚は青物。

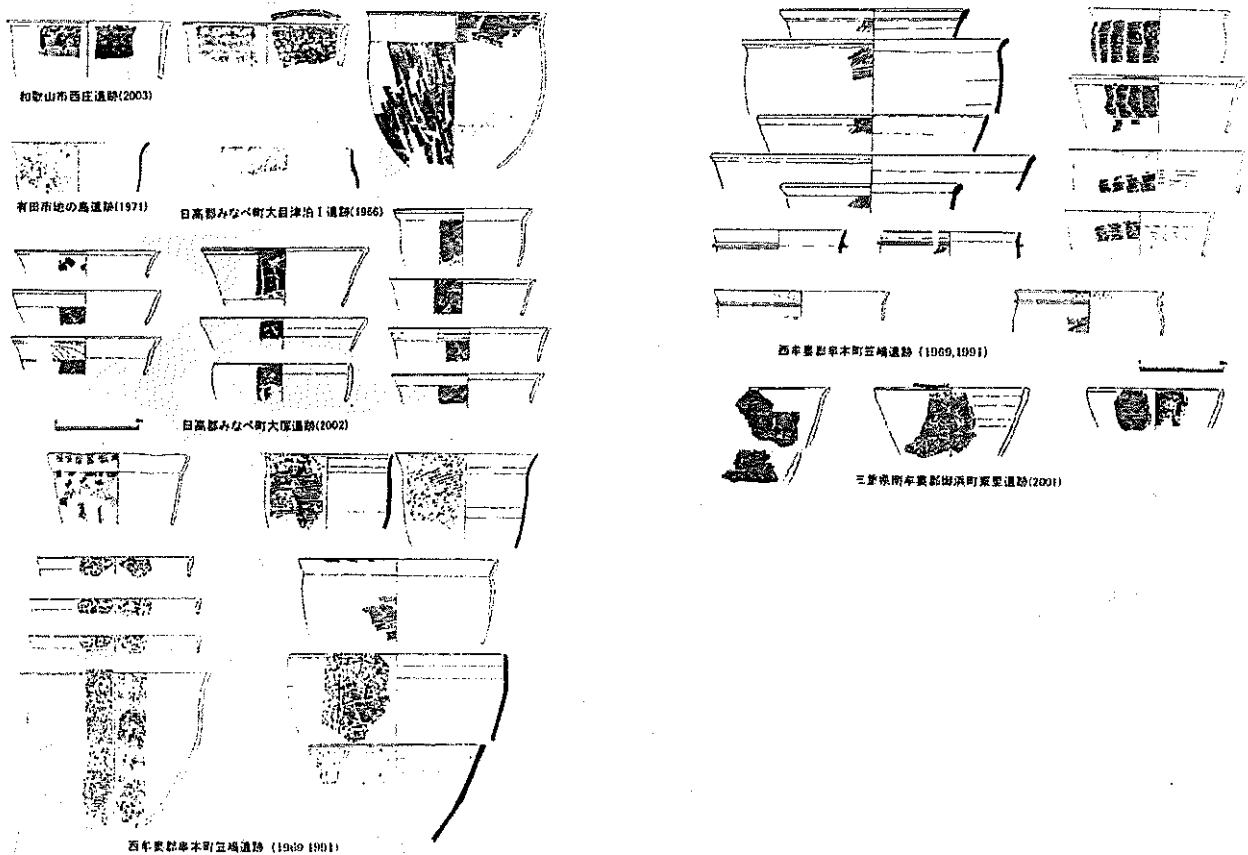
第15図 笠島遺跡出土動物遺体



第16図 笠島遺跡出土漁撈具

一方、笠島遺跡からは、大口径の甕（鉢）が出土する。これについては「製塩作業に使用されたもの」（1969）と言われてきた。

管見では、西庄遺跡で3点、地の島遺跡で1点、大目津泊I遺跡で1点、大塚遺跡で10点、笠嶋遺跡では13例、そのうち口縁部に鏝が付くタイプのものが4点出土して



第17図 紀伊半島出土大型鉢型土器
『古墳時代の海人を再検討する』第56回埋蔵文化財研究集会 2007

いる。紀伊半島東岸の三重県東里遺跡において同様の鉢形土器が4点出土している。これらの土器の帰属時期は紀伊半島での出現はおよそ庄内期であって、最も新しいのは西庄遺跡で確認できるおよそ5世紀後半である。この大型の鉢型土器は、製塩用としても十分機能は持ち合わせているものの、カツオ等を材料とする水産加工品（可能性として生節を想定）の煮炊き用として使用されたと推測できるのではないかと考えたい。しかしながら、伊豆半島例、房総半島、小笠原例等ではその出現が7・8世紀とかなりの開きがある。今後の検討課題である。とりあえず問題提起としておきたい。

8 まとめ— 漁撈技術の系譜と伝播—

複合釣針の直接的起源は久保の考える通り田辺湾沿岸、紀伊半島西部でカツオ擬似餌竿釣り用に開発された特徴的な形態の鹿角製単式釣針にあると思われる。西庄遺跡、磯間岩陰遺跡と白浜町日向浦貝殻島貝塚に出土例があり、西庄遺跡、磯間岩陰遺跡の共伴遺物からは5世紀後半と考えられ、磯間例がやや西庄例に先行するとみられる。久保は日向浦例はこれより古く古墳時代前期に遡る可能性を指摘し、「複合釣針化は田辺湾沿岸、紀伊半島西部で成し遂げられたと推定し針部の鉄器化も田辺湾沿岸で時を経ずして行われた」と考える。

この技術は6世紀中頃までは紀伊半島西部以外にはなく、これ以降に、志摩半島や伊豆半島、三浦半島へ伝えられたと考える。三浦市海外洞穴例は磯間岩陰例との共通点が非常に多く、直接的な伝播を想定できる。カツオなど外洋性回遊魚を追う紀伊半島西部の漁民集団の、広範な移動性と航海技術に裏打ちされた主導性をうかがうことができる。カツオの移動性が高いことをふまえれば、漁民集団の接触は十分考えられる。黒潮を漁場とする海民集団によって伝播されたものと考えられる。

また、カツオ釣り針の分布と大型の鉢型土器の分布はおおよそ重なるのではないかとの見通しを持っている。今後検証していきたいと思っている。

参考・引用文献

- 浦 宏「紀伊国西富田村日向浦貝殻島調査概報」『紀伊考古』第4巻第1号 1941
『南紀笠島遺跡』笠島遺跡発掘調査報告書刊行会 1969
中村勉「「角」とよばれる釣り針について—三浦半島出土の資料を中心として」『考古学研究』158
1993
「磯間岩陰遺跡」『田辺市史』第4巻考古資料編 1994 田辺市史編纂委員会 1994
『シンポジウム製塩土器の諸問題』塩の会シンポジウム実行委員会 1997
宮下章『鯉節』ものと人間の文化史 97 2000
『西庄遺跡』和歌山県文化財センター2003
「考古学から見たカツオ漁」松井章『日本人はなぜかつおを食べてきたのか』
かつおフォーラム開催記録 2005
『古墳時代の海人集団を再検討する』第56回埋蔵文化財研修集会 2007
渡辺誠「カツオ釣り用の角釣り針について」『地域と学史の考古学』2009

*2012年9月8・9日高知大学で開催の海洋考古学会
「カツオ釣り針の成立と展開」発表要旨